

大邱鳳山町小学校について：在朝鮮「内地人」学校の事例研究

稲葉， 継雄
九州大学大学院人間環境学研究院教育学部門：教授

<https://doi.org/10.15017/7376525>

出版情報：国際教育文化研究. 10, pp.1-18, 2010-07-15. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



大邱鳳山町小学校について

—在朝鮮「内地人」学校の事例研究—

稲葉 継雄

はじめに

大邱における日本人小学校の歴史は、日韓有志立の「日語学校」であった達城学校に遡る。達城学校は、1899年7月、岡山県人膝付益吉が大邱一帯の官吏を中心とする韓人名士と謀って設立した学校で、日本語教育を通じての「韓人子弟の開導」¹⁾を目的とした。しかし、当地居留邦人の要請に応じて1904（明治37）年、邦人子弟の教育も併せ行なうようになった。達城学校への日本人学級の併設から大邱尋常高等小学校の分離独立までの経緯は次のとおりである。

明治三十七年四月、日露の国交破れて、京釜鉄道の速成工事が命ぜられ、日本人の大邱に来住するもの日毎その数を増加するや、学齢に達した児童の数亦た少なくなかつたので、達城学校の膝付益吉は無月謝を以てその教育を引受け、一人の女教師を聘し、先づ二部教授の方法を取り、三十八年の春特に校舎一室を増築して、日本児童の教室に充当し、その児童の数、一時は七十余名の多きに達したことがある。三十八年の八月、日本居留民会は月額四十円を提供して日本児童の教育を暫くそのまま達城学校に依頼せんとしたが、膝付益吉は日韓児童共学の不可を説き、別に小学校の設立を希望したので、民長田所幸衛は居留民会の決議に依り寄附金を募集し、北門外（今の錦町）に一家を借入れこれを修理して仮校舎となし、明治三十八年十月二日、大邱公立尋常高等小学校の名の下に開校式を挙行了した。²⁾

大邱尋常高等小学校は、その後大邱「第一小学校」と通称されるようになる。1918年4月、校区を割いて大邱本町尋常小学校（第二小学校）が新設されたからである。そして、1921年11月、再び第一小学校から枝分かれして登場したのが大邱鳳山町尋常小学校（第三小学校）であった。

「鳳山町小学校は朝鮮三大名門小の一つでした」³⁾とされている。地方都市大邱の、その大邱でも後発の鳳山町小学校が朝鮮3大名門小のひとつに数えられるようになった所以は何か、鳳山町小学校の教育や学校文化の特色はどこにあったか、を追究することが本稿の目的である。

一、学校沿革

大邱第三小学校設立への動きは、1920年2月に具体化した。当時の新聞は、「学校新築準備委員会」の発足を次のように報じている。

大邱学校組合会議に於て第三小学校新築の爲め六名の委員を挙げ之に関する一切の事項を調査せしむることとなり十五日豊田府学務主任の案内にて第一第二小学校の現況を調査したれば十八日午後一時より府庁樓上会議室にて委員会を開くべし⁴⁾

1920年3月、大邱学校組合の1920年度予算が編成された。「予算額約十三万円、前年度に比し倍額以上の増加なり這は第三小学校新築費に於て膨脹せるもの」⁵⁾であった。

1921年4月26日、大邱鳳山町尋常小学校の設立が認可された。ただし、この時、見た目の変化は何もなく、鳳山町小学校が、校舎の落成を待って実際に開校したのは同年11月15日のことであった。職員は校長以下8名、学級数7、児童391名であった。第一小学校からの引越しの様子は次のとおりである。

思い起しますと大正十年、五年生になったとき、新設校に移るのだと聞かされ、とてもうれしく思いました。それまでお世話になった第一小学校では下駄箱が足りず私達は校庭の片隅に履き物を並べて教室にハダシで出入りしていたのです。

教頭先生から新設校の校長に栄進なされた平野校長をはじめ担任の浪瀬先生に引率されて、机や椅子や学校用具など分けて貰ったものをリヤカーで運びました。⁶⁾

鳳山町小学校の校地は、後(1935年)に大邱武道館の移転が問題となった際、「当時交換的に敷地を提供建設した第三小学校(官有地)を移転させてその後へ移転するか」⁷⁾が論議されたところを見ると、1920年当時は武道館の敷地だったようである。

鳳山町小学校の校舎は、木造2階建であった。新築当時は瀟洒な建物だった筈であるが、やがて「第三小学校ボロ学校」⁸⁾といわれるようになった。それは、1923年、本家に当たる第一小学校が近代的な鉄筋コンクリート2階建に改築されたからである。第一小学校の校舎は、「鉄筋コンクリート建造にして、莫大なる工費を要し建築の莊嚴に於て全鮮小学校校舎に冠たり」⁹⁾と評されたものである。

1927年3月、PTAの鳳山町小学校版「育鳳会」が組織された。育鳳会の発足が次のように新聞報道されること自体、鳳山町小学校が大邱の地域社会において如何に注目される存在であったかを物語っている。

大邱鳳山町公立小学校児童の保護者並に賛助者を以て組織した育鳳会は十日午後四時より同校で発会式をあげ左の如く役員を決定した…(中略)…

因に本会は学校教育と家庭教育との連絡をはかり教育上諸般の後援をなし児童教養の全きを

期すと 10)

育鳳会の活動の一環として、1927 年夏、「海浜聚落」と称する臨海学校が開始された。具体的な内容は次のとおりである。

大邱鳳山小学校では同校飯田校長初め父兄会の協議の下に本月廿六日から八月五日まで十日間児童の保健増進精神修養および団体動作の涵養をはかる為釜山松島海岸に臨海学校を設置する事となり会員募集中であつたが会費は十日間の宿泊料および往復の汽車賃まで含んで一人僅五円といふので申込者増加し現在では児童の百余を初め父兄も五十余名の多きに達したので同校では初めての催しではあり期間中に父兄慰問の為父兄だけの船釣の余興を行ふ外廿人乗のランチに分乗して港湾見学も行ふと 11)

「海浜聚落」は、参加者に強烈な印象を残したようで、鳳山町小学校同窓会誌にはこれに関する追憶談がいくつも掲載されている。次の文は、1928 年当時の 4 年生が 1998 年に記したものである。

丁度七十年前の事、小学四年の夏。竹重先生の時でした。参加は五名で…（中 略）…全体では六十人でしたが、広い百畳敷の部屋からあの美しい大海原を思う存分眺めながら楽しく過ごした十日間の生活、共に食事をし自習したり遊んだりそして海で思い切りはしゃいだあの時の楽しかった事は七十年経った今も鮮やかに生々しく数限りない思出が蘇って参ります。…（中 略）…

一、心身共に鍛えんと

父母の膝もと離れ来て

二、浮ぶ白帆に旭は映えて

岩に砕ける白波は

三、浮ぶ対馬に陰ほんのりと

まきの島影鮮やかに

夕焼け雲に包まれて

遠き海原余波は踊る

四、寝起き食事に静養に

さては水泳学習に

きまり正しく睦まじく

楽しき我等の聚落よ

旗（旗生——稲葉註）先生が残して下さったこの歌を唱って是からもあの美しい海から次から次へ広がる懐しい思い出を懐しみつつ、是からどれ程生きられますか分かりませんが歌いたいと思います。12)

1929 年 1 月、特別教室が完成した。この特別教室ができるまでには、1926 年 8 月に大邱府学校組合が「起債金額一万五千元（本町公立尋常小学校特別教室建築費及大邱公立尋常高等小学校並鳳山町公立尋常小学校特別教室設備費に充つる為）」¹³⁾を決議して以来 2 年半の歳月が必要であった。

1929 年 4 月、井上俊宏が第 5 代校長に就任し、新校長の勤労教育重視の方針に基づいて翌 1930 年から養蚕が始められた。責任者に指名された小林静六訓導は、「準備も無いし進学指導の障碍になるので反対したが取りあげられず」、「男が桑葉集め、女子が飼育」¹⁴⁾という分業体制が強行された。養蚕には、勤労精神の涵養という教育目的のほか実利的な目的もあった。1930 年度すなわち「昭和五年度に九貫余り売つて得た三十三円三十三銭は学校々旗制定の基金となし」¹⁵⁾た。

鳳山町小学校には、前述した育鳳会の下部組織として「母の会」があり、例会を開いていた。1929 年 6 月 9 日付の『京城日報』に、「大邱鳳山町小学校『母の会』例会は十日午後一時から行はれ当日は山崎府尹の講演、近沢氏の海外視察談などがあるはず」という記事がある。（「母の会」の結成時期は不明）

1930 年 11 月、大邱府学校組合議員らは、「敷地狭小に悩んでゐる府内鳳山町小学校隣接地買収につき陳情するところがあつた」¹⁶⁾が、その 1 週間後には、「鳳山町小学校敷地拡張のため隣接民有地百二坪を千六百円で買収する件を満場異議なく可決し」¹⁷⁾た。

1931 年 5 月、校旗ができた。その資金が、児童が育てた繭の売上げ金であったことは先に見たとおりである。

1931 年 9 月、満州事変が勃発、鳳山町小学校の子どもたちは、早速、出征兵士への慰問文送付や義捐金募集などの対応を示した。『京城日報』は、「大邱鳳山小学校生徒の美挙」を次のように報じている。

大邱鳳山町小学校六年生岡本和子さん外五名は一日午後一時半頃大邱憲兵隊に出頭し

これは僅かですが私達三十名のお小使銭^(ママ)から出し合つたものです満洲の各兵士さんに温かい着物を買つて上げて下さい

と十一円三十五銭と慰問袋五個をさしだした、そして尚言葉を續けて

私達は親から貰つたお小使銭の内毎日二銭づゝを出しあつたのです、この一ヶ月間は決して活動にも行きませんでしたと¹⁸⁾

1931 年は鳳山町小学校の創立 10 周年に当たり、10 月から 11 月にかけて各種の記念行事が行なわれた。概要は次のとおりである。

大邱鳳山町小学校は十五日が創立十周年記念日に相当するので今秋を期して十周年記念大祝賀会を開くことゝなり去る七日の運動会を皮切りに十四、五の両日児童作品展覧会十五日記念祝賀式、ついで学芸会及び育鳳会雑誌をも発行することゝし着々実行し児童作品展覧会は内鮮満は勿論遠く外国からも出品があつた¹⁹⁾

この記事は1931年10月16日付で、記者は、鳳山町小学校の創立記念日（11月16日）を1ヵ月勘違いしているが、それはともかく、児童作品展覧会に「内鮮満は勿論遠く外国からも出品があつた」ことは注目に値する。

創立10周年記念行事の目玉のひとつは、創立記念日当日に行なわれた校歌の制定であつた。訓導旗生護の作詞・作曲による校歌の詞は次のとおりである。

一、琵琶の裾野に風薫る

楽しき我等の 学び舎は

その名もゆかし 鳳の

高き姿に生立てり

二、学園^{にわ}に親しき松桜

伸び行く我等の 象徴^{しるし}なり

正しく強く麗しく

御国の花と咲き出でん

三、やがて祖国を背負ふ身ぞ

尊きみことかしこみて

堅忍自彊諸共に

学^{まなび}の道に進まん

1934年春、それまで農家から譲り受けた桑の葉で蚕を育てていた鳳山町小学校は、桑の苗から栽培して繭の一貫生産作制を目指すことになった。これに関する新聞記事は次のとおりである。

小学校生徒が産業奨励の波に乗つて桑の実習栽培——大邱鳳山小学校は二年前（4年前の誤り——稲葉註）から養蚕実習をなしつゝあるが今度小西牧場用地二反歩を借受け桑樹を栽培しそれによつて養蚕をなすべく十六日午後二時から同校六年生一同は九百本の桑苗を植栽、道養蚕係から小曾戸養蚕技師と福永技手が応接し蚕の話を聴かせた上実地指導を行つたが大邱府内各小学校を通じ同校が桑園の先鞭をつけたわけである²⁰⁾

このように鳳山町小学校の養蚕教育は徹底していたが、1940年には中止された。「時局進展に校長交替もあつて幕を閉じ」²¹⁾たという。

1935年、運動場が拡張された。「府内初等学校中特に運動場の狭隘を感じてゐた大邱尋小、鳳山尋小、大邱普校は本年度に入り一人当二坪平均で拡張されることになつた」²²⁾のである。

1936年、大邱東雲町尋常小学校（第四小学校）が開校、鳳山町小学校の児童の一部が移籍した。鳳山町小学校の全学級数は、1935年が14、1936年が12であるから学校全体としての影響は軽微だったようであるが、当時の在校生森崎和江は、「わたしが三年生になった時、第四小学校が新設されて友人の半分が移って行つた」²³⁾と言っている。

1937年7月、蘆溝橋事件が起こり、鳳山町小学校では、満州事変の時と同様これに直ちに対応した。次は、その一例である。

七月の二十日過ぎに、八十聯隊も出征した。軍旗を先頭に大勢の将兵が出征するのを、わたしら小学生も中央通りの朝鮮銀行の四つ角に全校生が整列して、見送った。日の丸の小旗をふり、万歳を叫ぶ中を、文子ちゃんのおとうさんも馬に乗って駅へ向かった。その他幾人もの友だちのおとうさんが出征し、第三小学校ではすぐに慰問文を書き慰問袋をこしらえて送った。²⁴⁾

満州事変時と違ったのは、蘆溝橋事件が日中戦争へと展開する中、鳳山町小学校の児童にも次のような勤労奉仕が求められたことであった。

わたしたちに、兵隊の苦勞をしのばせる意味で、八十聯隊から軍服の修理がどっさり届いた。夏休みの数日を四年生も登校してボタンつけとかボタンホールのかがり縫いをした。軍服はよく洗ってあるのに、汗臭かった。上級生がミシン室で補修をした。²⁵⁾

鳳山町小学校の事実上の終焉は、1945年8月20日頃だったようである。召集を解除されて学校に戻った姫嶋忠生が、最期の状況を次のように記している。

私は8月17日頃召集解除復員、学校に帰りました。学校は当時自動車隊の兵舎になっていましたが、この隊も田舎の内地人の引揚援助の為出動。その日から御真影を守る為宣武第四部隊から歩哨を派遣してくれ巡察の兵隊の靴音を宿直室で聞いた思い出があります。数日ならずして道庁からの通達で御真影を焼くことになりました。早朝全職員登校、御真影と共に各教室正面に掲げてあった皇居二重橋の写真などを集めて焼きました。メラメラと炎が顔のあたりを伝うとき“負けた”という実感が込み上げてきました。旧日本の終章でした。²⁶⁾

ところが、在校生の感懷は、姫嶋訓導とはおおいに異なった。当時6年生だった向尾孝雄が、54年後の1999年、「子供心の思慮の無さ」を次のように悔いている。

戦い終って数日後全校生徒登校連絡があり全員登校する。講堂で校長が色々訓話したがサッパリ記憶にないのをみると心に残る立派な話ではなかったのだろう。生徒は各学級に入り在学証明を渡される。そして学校在庫の大量の学用品、ノート、鉛筆、洋紙、半紙、絵の具他諸々が全校生徒に配られた。特に六年生の私達に多かったようで風呂敷に包みきれない程だった。

思えばこの日こそが私達級友が普段と変らぬ顔を揃え、遊び、騒ぎ、教室を運動場を走り廻った最後の日であった。八月何日だったか？まだ明日も今日と同じ様にみんなと会えるという感じで特別の感情は無かった。子供心の思慮の無さ。ほんとに今日で^{クラス}級の友と再び会えないかも知れないという思いがその時にあれば、もっともっと多くを語り体をぶつけ合って一晩中でも学校の教室で大騒ぎして名残りを惜しみたかった…。その思いのみがそれ以後今日迄五十四

年間、私の心に悔いとして深く残る。²⁷⁾

二、教員の去就

1. 校 長

初代校長平野勘一は、千葉県から慶尚北道に出向し、1914年9月以来大邱尋常高等小学校（第一小学校）の訓導を務めていた（1919～21年度は教頭）。そして、1921年11月、鳳山町小学校の分離独立とともに校長に就任したのである。1922年度も勤続したことは確かであるが、1923年版の「朝鮮総督府職員録」に初等学校教員の記載がないため何時まで在任したかは明らかでない。いずれにせよ、「先年同校平野前校長退職するに際しても相当波瀾を起こした」²⁸⁾という報道があるところを見ると、円満異動ではなかったようである。鳳山町小学校長の後は、龍宮普通学校（～1925年度）、善山普通学校（1926～30年度）、盈徳普通学校（1931～34年度）、江口普通学校（1935年度）、再び盈徳普通学校（1936～37年度）、盈進小学校（1938～39年度、以後不明）と、慶尚北道内の朝鮮人初等学校の校長を歴任した。

第2代の福崎澄八の鳳山町小学校長就任時期も、平野勘一の退任時期と同じ理由で明らかではない。しかし、1924年度内に「病気で内地帰郷」²⁹⁾しているから、在任期間は長く見ても2年に満たない。

第3代校長松添貫三は、大邱尋常高等小学校の平訓導から鳳山町小学校の開校とともに異動して教頭となり、続いて校長に昇任した。校長在任期間は、1925年3月末から26年4月末までの1年1ヵ月であった。その後は、達城普通学校（1926～31年度）、金泉小学校（1932～36年度）、迎日普通学校（1937年度）～迎日小学校（1938年度、以後不明、迎日普通学校と迎日小学校は同一校）と、内鮮の初等学校の校長を交互に務めた。

松添貫三が達城普通学校長に転出してから飯田勝正が第4代校長に就任するまで福山憲道が校長事務取扱を務めた。理由は不明である。

飯田勝正は、もともと慶尚南道の小学校教員であった。1909年5月以来釜山府内各小学校の訓導を務めた後、亀浦小学校長（1916～18年度）、釜山第六小学校長（1919～25年度）を歴任した。そして1926年4月、釜山普通学校長に任ぜられたが、何故か旬日にして辞めている。当時の新聞は、「新釜山公立普通学校長飯田勝正氏辞任につき十二日つけ左の如く発表された給三給俸依頼免本官 飯田勝正」³⁰⁾と人事異動の結果を伝えているだけである。

1926年7月1日現在の「朝鮮総督府職員録」では福山憲道が鳳山町小学校校長事務取扱であるから、飯田勝正が第4代校長となったのはこの後である。

1929年2月、飯田は、奏任官待遇を受ける初等学校長の有力候補に挙げられた。これに関する新聞記事は次のとおりである。

朝鮮における公立小学校普通学校々長にして十五年以上訓導の職にありすでに四級俸以上を受け功勞著しいものに対し全鮮より四十名を奏任官待遇とする事は既報の如くであるが慶北道は全鮮の各小学校分布の割合から見て三名乃至四名の該当者を見るべく目下その候補として噂

に上つてゐるものは約二十名であるが従来の功績その他から見て大坂慶州普校長、赤沢尚州普校長若林星州普校長、飯田第三小学校長等が最も有力視されてゐる³¹⁾

飯田が実際に奏任官待遇となつたかどうかは確かめえないが、全朝鮮で 40 名、慶尚北道で 3～4 名の候補のうちに入つたということは、1929 年 2 月の時点で飯田が、「功勞著しいもの」として広く認められていたことを示している。

しかし、彼は、同年 3 月末日付で金泉普通学校長への異動を命じられた。この人事が一般には左遷と受け取られたこと、そのため飯田の鳳山町小学校長留任を求める動きがあつたことを、新聞は次のように伝えている。

慶北道教育会の大異動^(ママ)については昨報の如く約三百名にわたる未曾有の大異動であつたが休職退職組をのぞき左遷組も数名あつた中に大邱鳳山小学校長から金泉普通学校長へ転出した飯田氏の如きはその最も甚だしきものとして一般から奇異の眼をもつて見られてゐる折柄大邱育鳳会並に大邱学校組合大邱母の会等が先づ動揺し寄りより協議中で今明日中には留任運動の挙に出でるべく見られてゐるが同氏の転出は各方面へ異常なるセンセーションを捲き起こしてゐる、先年同校平野前校長退職するに際しても相当波瀾を起こしたが今回の飯田校長の如き立派な教育者を大邱から去らすことは大邱の損失であり然も転出の裡面に面白からぬ噂あり学務人事行政の不徹底を暴露したものであると今後相当重大問題と化すであらうと見られてゐる³²⁾

大邱留任運動は効を奏せず、飯田は金泉へ転出した。その後の経歴は不明である。

第 5 代校長井上俊宏は、1922 年 7 月から大邱女子普通学校長（～1925 年度）、大邱寿昌普通学校長（1926～28 年度）と朝鮮人教育に従事していたが、教員歴の掉尾を内地人学校である鳳山町小学校で飾ることになった。鳳山町小学校長就任の翌年（1930 年）9 月には奏任官待遇となり、1934 年 1 学期末を以て勇退した。これまで見てきたように、鳳山町小学校の初代～第 4 代校長はいずれも短命であつたが、第 5 代井上校長に至って在任 5 年半の安定政権が初めて実現した。その在任中に校旗・校歌が制定され、養蚕を通じた勤勞教育が強調されたという意味でも、井上は、鳳山町小学校史上存在感のある校長であつた。

第 6 代校長野村綱秀は、鳳山町小学校長となる前すでに 13 年以上の校長経験があつた。すなわち、浦項小学校長（1921～24 年度）、金泉普通学校長（1925～28 年度）、大邱寿昌普通学校長（1929～32 年度）、尚州普通学校長（1933～34 年度）がそれである。したがって、1934 年 9 月の鳳山町小学校長就任当初から奏任官待遇だつたようである。井上前校長退任時の新聞に、「勇退組の筆頭は鳳山町小学校長井上俊宏氏で後任は既に銓衡済みであるが奏任待遇関係で発令は多少遅れる模様である」³³⁾とある。

野村校長の発令はたいした遅滞なく行なわれ、以後野村は、1939 年 1 月まで 4 年強在任した。その間、大邱東雲町小学校（第四小学校）の設立認可から開校まで（1935 年 5 月～36 年 3 月）同校の校長事務取扱も務めている。野村綱秀が校長事務取扱を兼ねたこと、真野重光が鳳山町小から東雲町小に移って訓導陣の中核となつたことから、大邱第四小学校は第三小学校の分家

であったと見ることができる。

鳳山町小学校長の後の野村は、金泉南山町小学校～国民学校の校長を務めた（～43年度、以後不明）。

第7代校長富田三次郎は、大邱尋常高等小学校～大邱尋常小学校の教頭（1929～32年度、1932年に尋常高等小学校の高等部が高等小学校として分離独立）から花園普通学校長（1933～34年度）となり、永川普通学校長（1935年度）、押梁普通学校長（1936～37年度）、慶尚北道視学（1938年度）を経て1939年1月、鳳山町小学校長となった。在任は、1943年春に急逝するまでの約4年であった。訓導姫嶋忠生によれば、富田三次郎は「鳳小中興の名校長と謳われた」³⁴⁾という。姫嶋にとって富田は大分県の小学校時代の恩師でもあるので、その分割引きが必要であろうが、他の訓導（武藤大介）も、次のように富田を高く評価している。

姫嶋先生^(マツ)の言われる名校長富田先生は私も敬慕した一員で「教壇は教師の桧舞台だ。そこで教える者は千両役者であれ。教壇に上れない者は教師にあらず」と言われた先生は必ず週何回か教壇に立って主に国語の授業をされました。この教訓を胸に、戦中戦後管理職に就くことを拒み通して終身教師の道を歩みました。今でも悔は残しておりません。³⁵⁾

富田三次郎の急死に伴って第8代、結果的に最後の校長（1943～45年度）となった山田武雄は、第6代校長野村綱秀の鹿児島師範学校同窓生であった。校長歴は、1922年の義城小学校に始まって安康普通学校（1924～28年度、1923年度は義城小学校か安康普通学校か不明）、青里普通学校（1929～33年度）、寿城普通学校（1934～35年度）、大邱寿昌普通学校～小学校～国民学校（1936～42年度）そして鳳山町国民学校と、実に四半世紀近くにのぼる。鳳山町国民学校では、戦争末期の混沌時代だった所為か、当時の在校生・卒業生には山田武雄という本名よりも、顔が日本人離れしていたところから付けられた「パーシバル（シンガポールで日本軍に降伏した英軍司令官）」という渾名のほうが記憶されているが、おとなの間では、子どもたちの戦意を高揚させた「非常に立派な先生」と評された。終戦当時慶尚北道内務部長であった倉島至は次のように述べている。

私の在勤当時の鳳山町小学校の校長先生は山田さんだった。…（中略）…非常に立派な先生で、その御指導で生徒達の戦意は高揚されていた。長男の康はその後大邱中学の一年生当時幼年学校を受験し合格したが、これも山田校長先生のご指導に因由したものではないかと思っている。³⁶⁾

ただし、姫嶋忠生によれば「山田武雄、野村綱秀両名とも鹿児島師出身です。大した人ではありませんでした。なぜ、こんな人が大邱の校長に？」³⁷⁾と、山田・野村両校長の評価は芳しくない。

2. 訓 導

鳳山町小学校開校時の教員陣は、校長平野勘一と訓導松添貫三・西英和・有馬正雄・宮脇始・浪瀬鉄次・井内ツル・広中一的の8名であったが、広中を除く7名が大邱尋常高等小学校からの異動であった。平野と松添については前節で述べたので、その他に関して補足しておこう。

西英和は、鳳山町小学校の教務主任格から清道小学校の校長となった（1925～26年度）。以後の消息は不明である。

有馬正雄は、1922年か23年に改姓、近沢正雄として鳳山町小学校の教頭となり（1925～29年度）、以後、尚州小学校長（1930～34年度）、金泉小学校長（1935～39年度）、龍州小学校長（1940年度、以後不明）を務めた。

宮脇始は、1926年に小島と改姓、西英和と同じく鳳山町小学校の教務主任格から琴湖普通学校の校長となり（1929～32年度）、続いて礼安普通学校長（1933～35年度）、義興普通学校長（1936～37年度）、亀山小学校長（1938～40年度）、入室国民学校長（1941～43年度、以後不明）を歴任した。校長としての勤務校はいずれも朝鮮人学校であった。

浪瀬鉄次は、1927年度いっぱい鳳山町小学校に勤め、1928（昭和3）年3月、東京に出た。本人によるその後の経歴は次のとおりである。

私も大邱から昭和三年上京、立正大講高師部地歴科に入学三年の秋学資にこまり再渡鮮黄海道内の小普校長を転々し最後は京義線の金川普校長で引揚³⁸⁾

井内ツルは、1936年度まで鳳山町小学校に15年以上勤続した。井内の永年勤続表彰の最初は、朝鮮での10年勤続に対するものであった。1929年11月14日付の『京城日報』地方欄に、「十ヶ年勤続者として大邱高等女学校教諭松井静江鳳山町小学校近沢正雄、同井内ツルの三氏に対する表彰式は十三日午前十時から大邱府庁で盛大に挙行された」という記事がある。続いて1931年11月、井内は、鳳山町小学校開校10周年に際して唯ひとり、勤続10年の表彰を受けた。育鳳会会長から井内訓導に贈られた感謝状の文面は次のとおりである。

大正十年本校創立ノ当初ヨリ就職セラレ爾来今日ニ至ル迄満十ヶ年終始一貫親切熱心ニ児童ノ指導ニ尽瘁セラルルハ父兄ノ平素ヨリ深ク感謝セル所ナリ本日我学校ノ創立十周年記念式典ヲ挙行セラルニ際シ記念トシテ水盤一個ヲ贈呈シ感謝ノ意ヲ表ス³⁹⁾

1933年10月、井内は勲8等に叙せられた。「因に女教員で勲八等に叙せられたものは全鮮初等学校中で井内訓導をもつて嚆矢」⁴⁰⁾とする。

このように、西・近沢（有馬）・小島（宮脇）・浪瀬は鳳山町小学校訓導の後（とくに西と小島は、教頭でなく教務主任格から）他校の校長となり、井内は女教員として功成り名を遂げた。これだけでも鳳山町小学校が、開校初期から大邱初等教育界の梁山泊的な性格をもっていたと言えることができよう。

1922 年以降鳳山町小学校に赴任した教員の中からも他校の校長が輩出した。とくに鳳山町小学校訓導から直ちに校長として転出した人々は次のとおりである。（括弧内は鳳山町小在任期間）

中楨 保芳（1925～27 年度）	寧海普通学校長
金子 巖基（1928～29 年度）	倭館小学校長
竹重 一正（1928～29 年度）	善山小学校長
縄田 志一（1925～33 年度）	大邱東村小学校長
上村 猛（1932～34 年度）	永順普通学校長
丹野 利夫（1930～34 年度）	利安普通学校長
酒井 正（1933～35 年度）	琴湖普通学校長
渡部 之夫（1932～35 年度）	南後普通学校長
小林 静六（1929～37 年度）	金泉大和町小学校長
山下健次郎（1932～37 年度）	嘉昌小学校長
横田 重栄（1932～38 年度）	安定小学校長
清水須美彦（1936～38 年度）	中東小学校長

このうち酒井正・小林静六は鳳山町小学校教頭からの転出であったが、その他は校内序列 3 位以下、中でも竹重一正は 9 位、丹野利夫は 10 位からいきなり他校の校長となった。

このほかの鳳山町小学校教員でユニークな経歴の持ち主を何人か紹介しておこう。

福山憲道は、すでに 1925 年の時点で慶尚南道密陽の密陽小学校の校長であった。翌 1926 年から慶尚北道の教員となり、その皮切りが大邱鳳山町小学校の校長事務取扱であった。以後、清道小学校長（1927～29 年度）、鳳陽普通学校長（1930～35 年度）、豊角普通学校長（1936～37 年度）、松西小学校～国民学校長（1938～42 年度）を歴任した。

宮田堯友も、福山憲道と同じく慶尚南道から慶尚北道に異動し、鳳山町小学校訓導（1927～32 年度）の後、普通学校長と道視学を交互に務めた。宮田自身が語った経歴は次のとおりである。

顧りみますと私は山口から釜山へ、釜山から大邱へ転勤し、大邱鳳山町小学校にて教鞭をとるようになったのは昭和二年でした。四～五年間在職後大邱女子普通校へ、そして其の後尚州女子普通校の校長になったのは昭和十年頃だったと思います。昭和十一年二月二六日の二・二六事件を尚州で知ったことを思い出すからです。

その後慶北道庁学務課視学として大邱で勤務させて頂きました。そして寿昌国民学校校長を経て再び道庁学務課に戻り、学務行政専任中終戦を迎えました。⁴¹⁾

鳳山町小学校の校歌を作詞・作曲した旗生護は、鳳山町小学校（1928～30 年度）、大邱尋常高等小学校（1931 年度）、大邱高等小学校（1932～35 年度）までが大邱所在内地人学校の訓

導で、その後は栄州・慶山・慶州など各地の朝鮮人初等学校（普通学校・小学校・国民学校）の訓導・校長を務めた。息子醇は、「父が転勤の度にピアノの運搬が大変だった」⁴²⁾ことを覚えている。また大邱高等小学校時代の1935年2月には、「凍る河中で鰻を釣り 病む教へ子に贈る 更に級友と神社に平癒祈願」⁴³⁾という旗生学級の美談が報じられている。

真野重光は、1935年5月、大邱東雲町小学校の開設認可とともに鳳山町小学校から東雲町小学校に移り同校草創期（1935～36年度）の教務主任格を務めた後、鬱陵島小学校の校長となった（1937～39年度、以後不明）。

以上、鳳山町小学校から転出して他校の校長となった人々について見てきたが、逆に他校の校長から鳳山町小学校の訓導となった、一見降格人事ともとれる例もあった。松川庄がその人である。松川は、北安普通学校長（1932～34年度）、丹村普通学校長（1935年度）、嘉昌普通学校長（1936～37年度）と、朝鮮人学校で6年の校長経験があったが、鳳山町小学校には序列3位の訓導として着任した。その後「鳳山小学教頭から道視学に栄進させて頂き将来を楽しみに過していましたが戦後も近くなる頃、龍山の部隊に召集され南朝鮮の離れ小島の高下島で終戦をむかえ」⁴⁴⁾たという。

鳳山町小学校教員の学歴に関して目立つのは、京城師範学校出身者が多かったことである。彼らの氏名、京城師範学校卒業年、鳳山町小学校在任期間は次のとおりである。

縄田 志一	1924 年	1925～33 年度
小林 静六	1926 年	1929～37 年度
中道フジ子	1927 年	1927～29 年度
岡本 昇	1927 年	1928～31 年度
角 伝	1927 年	1929～34 年度
松川 庄	1927 年	1938～39 年度（以後不明）
真野 重光	1928 年	1928～34 年度
王原 実良	1930 年	1930～35 年度
横田 重栄	1930 年	1932～38 年度
岡崎 時則	1930 年	1939～44 年度
井上 正雄	1931 年	1931～32 年度
武藤 大介	1932 年	1938～44 年度
直井 武久	1933 年	1933～40 年度
坂下 和枝	1933 年	1934～38 年度
福山 勝治	1934 年	1934～37 年度
久野 大二	1934 年	1938～39 年度
田辺 保男	1935 年	1935～36 年度
姫嶋 忠生	1935 年	1935～45 年度
木原 三郎	1938 年	1944 年度（以後不明）
犬飼 良郎	1942 年	1944～45 年度

このほか浪瀬鉄次が、京城師範学校の前身である京城中学校附属臨時小学校教員養成所の出身であるが、このリストからは省いた。また中道（清水）フジ子と坂下和枝は、京城師範学校に女子演習科が付設されていた時代（1925～34年度）の同科の修了生である。

縄田志一が1925年に着任して以来、鳳山町小学校には京城師範学校卒の教員が常に在任した。とくに1929～39年度は6～8名を数え、この間の鳳山町小学校教員12～18名の半数前後を占めた。最も比率が高かったのは1935年の61.5%（13名中8名）である。このように京城師範学校出の教員が多かったのは、後述するような鳳山町小学校区のレベルの高さ、換言すれば教育要求の大きさに行政当局が配慮した結果であろう。

鳳山町小学校の歴代教員の中にはふたりの鳳山町小学校OBがいた。中島正幹と柴田芳がそれである。両人は大邱師範学校の先輩・後輩でもあり、中島は1932～33年度、柴田は1939～41年度、訓導として母校に勤務した。

三、鳳山町小学校の学校文化

鳳山町小学校が「朝鮮三大名門小」のひとつに数えられるようになった最大の要因は、一言で言って教育環境のよさであった。第一小と第二小が大邱の「下町」の学校であったとすれば、第三小である鳳山町小学校は、いわば「山の手」の学校であった。その「山の手」の校区には陸軍（第80連隊）・法院（大邱地方法院）・慶尚北道庁の各官舎があり、植民地支配者たる内地人の中でも特権階層に属する人々が住んでいた。また、鳳山町小学校の周囲は学校街とも言うべく、いずれも大邱では唯一の中学校・高等普通学校・師範学校・商業学校が軒を並べており、その教師たちの多くが鳳山町小学校区の住民であった。教員の中でも象徴的な存在は大邱師範学校の歴代校長（鳥飼生駒・市村秀志・高力得雄）で、「どの方も皆父兄——当時の育鳳会員であった。」⁴⁵⁾各官舎の住人や教員は、「たしかに慶尚北道の知的階層を網羅していた」⁴⁶⁾と言えるほどであった。

保護者の知的レベルの高さは、子女への教育熱に直結した。1943年当時新任訓導であった岡田（田島）昌子は、「父兄参観は出席八割。廊下教室を埋める父兄の熱心な参観に完全にアガってしまいました」⁴⁷⁾と述懐している。

保護者の教育熱に応えるべく、教師たちも努力した。その一端を窺わせるのが、「貴重な教材を汗だくで製作 大邱第三小学校先生達のお仕事」という見出しの次の新聞記事である。

「郷土教育」所謂みせる為す——といふことの直観主義教育について夙に心を碎いてゐる府内鳳山町第三小学校では暑中休暇中、先生達の仕事の一つとして地理、〇〇、国史等に関係ある生徒の学習上必要な教材例へば人口分布図、米生産分布図などを汗だくで約二百枚を完成せしめることになった。真に貴重な教材であるだけにこれが仕上げは容易なことではない。いよいよ完成の暁は教壇にあつて徒らに先生の無駄口は省かれ百聞一見に如かずの字義通り子供をうなづかせ、子供のものにすることが出来るので非常にこれが完成を注視されてゐる⁴⁸⁾（〇〇は判読不能）

このような雰囲気の中で鳳山町小学校は、進学校としての地位を確立していった。次の引用は 1930 年の卒業生によるものであるが、大邱中学校の新入生において鳳山町小学校が最大のシェアを占めたことがわかる。ちなみに当時、尋常科 6 年生男子児童は 3 小学校ともほぼ同数（60 名内外）であったが、第一小には 150 名ほどの男子高等科生がいた。

鳳山町小学校は、陸軍官舎や法院官舎等のインテリ連の子弟が多いので、中学の四割位が第三小学（鳳山町）、三割が第一小学、二割が第二小学で、後の一割が浦項や慶州等の地方の小学からであった。従って中学に入ってからでも小学校の友達が多く、小学校の延長の感じであった。⁴⁹⁾

上の引用の翌年（1931 年）は、鳳山町小学校の開校 10 周年であった。その記念誌で、ある卒業生は、「本年は母校開校満十周年校運は歳と共に発展、今や大邱、否、全鮮の優良校となった」⁵⁰⁾という認識を示している。

軍人・官僚・教員などいわゆる転勤族の保護者が多い鳳山町小学校は、転校生が多いことでも有名であった。「ある年の六十四名の卒業生中一学年当初より引き続き在学していたものは僅かに二十九名だった。即ち他の者は中途入学者なのである。この外に中途入学し中途退学した者も相当多数あった」⁵¹⁾という訓導小林静六の証言がある。転入生の中には越境入学する者もいた。「鳳山町小は朝鮮の越境入学校だった」⁵²⁾とも言われている。転入生は鳳山町小学校のレベルに驚き、転出生は自信を持った。次にその例をひとつずつ挙げておこう。

六学年になった年の春、無理に父に願って転校したのが我が鳳山小であった。…（中 略）…やがて教室に入る。学友に紹介された。第一時。学友の学習見学。先づ臆を抜かれた。皆が予習をよくやつて来てゐること、常識が中々発達してゐること、学習の真剣なこと、田舎出の僕は全く驚かされた。⁵³⁾

福田さんは三年時東京の牛込に移った。内気で人見知りして友達が出来ないのを担任が心配して級友を遊びにこさせて下さった。でも学力では少しも東京の子に負けなかったそうです。レベルの高い東京の中心校で学力では自信が持てたとは鳳山小の教育レベルは大へん高かった訳です。⁵⁴⁾

進学校としての鳳山町小学校は、しかし、知育偏重あるいは進学準備教育一点張りだったのではない。たとえば 1936 年頃のスケッチ大会の様子は次のとおりである。

秋になり、月見山で府内小学校のスケッチ大会があった。この小山を中心にして思い思いに散り、スケッチをして持って来いとのことで、わたしは自宅近くまでそろそろと戻って行き、とうとうわが家の垣根に腰を下ろして、文子ちゃんの家を写生した。…（中 略）…

その頃内地では小学校一年生の最初の図画の時間には、画用紙の中央に横線を引き、「さあ、上半分に空色を塗りましょう。下は茶色を塗りなさい」と指導され、「出来ましたか。天と地で

す」というものだったと帰国した時に聞いた。次いでお手本の模写となり、それが図画の時間だったという。内地のすべての小学校がそうであったわけでもないだろう、が、植民地には模写を定めた文部省の教科書を、多少は度外視する試みも行われていたのだろう。スケッチ大会はこの年が第三回目であった。

スケッチ大会はそうに比較的のびのびと行われていた。⁵⁵⁾

子どもたちは、稽古事にも精を出した。それができたのは、言うまでもなく植民地ならではの豊かな生活があったからである。上の引用と同一の著者（森崎和江）が次のように述べている。

子どもたちのけいこごとにも割に盛んだった。小学校に入ると家庭教師のいる子もいたし、ピアノの上手な子もいた。バレエとか日本舞踊もはやっていて、発表会もあった。お仕舞を習う子もいる。わたしは習字塾に通うだけ。生活に対するつつましい感情が育っていた。

それでも当時の日本は昭和の不況期で、失業者三十万といわれていた時である。植民地のこの平凡な生活は内地では都市生活者のもので、一般には四季の行楽や温泉旅行はもとより、お手伝いを置くなど考えられないことだった。水道の普及さえ一部の都市にとどまっていた。

親類の者が内地から遊びに来ると、ぜいたくなもんだね、と言ったものである。古いもの、不便なもの、肉体労働を必要とするものなどは、クラスメートの家庭でも目にしなかった。⁵⁶⁾

文武両道という観点から見ると、鳳山町小学校の「武」は、「文」に比してやや見劣りしたようである。同窓会誌『育鳳』にも、1931年に朝鮮代表として甲子園に出場した大邱商業チームの二瓶投手・杉原捕手・依田遊撃手が「偶然三名共に鳳山町小の先輩」⁵⁷⁾だったこと、1934年の大邱「第一第二第三小対抗野球大会」に優勝したことが特筆されているくらいで、スポーツ関係の記述はあまり出てこない。

本節の最後に、鳳山町小学校には朝鮮人児童も少数ながら居たことを付言しておく。典型的な例は、大邱医専と大邱農林の配属将校を兼任した南（ナム）中佐の息子たちであった。南家は「日本人以上に日本人のご家庭でご子息はみな鳳小の同窓生」⁵⁸⁾だったのである。ちなみに、内地人小学校の朝鮮人卒業生は、普通学校卒の一般の朝鮮人と違い内地人と同一の試験を受けて中等学校に進学した。

おわりに

鳳山町小学校は、立地条件と人的環境に恵まれていた。立地としては大邱の学校街の一角を占め、保護者は、大袈裟に言えば「慶尚北道の知的階層を網羅していた。」彼らは「育鳳会」や「母の会」を組織し、学校を強力にバックアップした。そして京城師範学校卒を中心とする教師陣も、保護者の教育熱に応えるべく努力した。このような諸要因の相互作用の結果、鳳山町小学校は朝鮮屈指の「名門小」になったのである。

第2次大戦後、鳳山町小学校（終戦当時は国民学校）は消滅し、校地・校舎は慶北大学校師範大学附属国民学校（現、初等学校）となった。その旧校舎も朝鮮戦争中に焼失し、「残っている面影は道路沿いのヒマラヤ杉の大木だけ」⁵⁹⁾である。しかし、鳳山町小学校のエリート校としての伝統は韓国の国立大学附属校に受け継がれ、「進学を目指す教育熱心な大邱市民にとって憧れの的」⁶⁰⁾となっている。

〔註〕

- 1) 渡部 学 「二十世紀初期朝鮮における私立学校と書堂」 『兵庫農科大学研究報告』 第2巻第2号 1955年 p.118
- 2) 『大邱府史』 大邱府 1943年 pp.217 - 218
- 3) 『大邱中学校九州同窓会会誌 たいちゅう』 第20号 1999年 p.57 なお「朝鮮三大名門小」の第1が京城日出小であったことは大方の認めるところであるが、第2・第3については平壤若松小・釜山第六小・大邱鳳山町小など諸説がある。
- 4) 『京城日報』 1920年2月21日付
- 5) 同 上 1920年3月23日付
- 6) 『大邱鳳山町公立尋常小学校同窓会誌 育鳳』 第3号 1990年 p.1
- 7) 『京城日報』 1935年9月14日付
- 8) 森崎和江 『慶州は母の呼び声——わが原郷——』 新潮社 1984年 p.56
- 9) 『育鳳』 第4号 1991年 p.19
- 10) 『京城日報』 1927年3月13日付
- 11) 同 上 1927年7月5日付
- 12) 『育鳳』 第20号 1998年 p.12
- 13) 『京城日報』 1926年8月14日付
- 14) 『育鳳』 第17号 1997年 p.9
- 15) 『京城日報』 1933年6月20日付
- 16) 同 上 1930年11月8日付
- 17) 同 上 1930年11月15日付
- 18) 同 上 1931年12月3日付
- 19) 同 上 1931年10月16日付
- 20) 同 上 1934年4月20日付
- 21) 『育鳳』 第17号 p.9
- 22) 『京城日報』 1935年10月13日付
- 23) 森崎 前掲書 p.57
- 24) 同 上 p.101
- 25) 同 上 p.104
- 26) 『育鳳』 第23号 2000年 p.4
- 27) 同 上 同 上 pp.28 - 29
- 28) 『京城日報』 1929年4月3日付
- 29) 『育鳳』 第23号 p.8
- 30) 『京城日報』 1926年4月16日付
- 31) 同 上 1929年2月10日付
- 32) 同 上 1929年4月3日付

- 33) 同 上 1934 年 9 月 1 日付
- 34) 『育鳳』 第 21 号 1999 年 p.8
- 35) 同 上 第 22 号 1999 年 p.4
- 36) 同 上 第 5 号 1991 年 pp.1 - 2
- 37) 筆者宛 2007 年 5 月 5 日付姫嶋書翰
- 38) 『育鳳』 第 4 号 p.2
- 39) 同 上 第 18 号 1997 年 p.8
- 40) 『京城日報』 1933 年 10 月 7 日付
- 41) 『育鳳』 第 4 号 p.1
- 42) 同 上 第 23 号 p.1
- 43) 『京城日報』 1935 年 2 月 5 日付
- 44) 『育鳳』 第 10 号 1993 年 p.3
- 45) 同 上 第 21 号 p.8
- 46) 同 上 第 14 号 1995 年 p.12
- 47) 同 上 第 5 号 p.17
- 48) 『京城日報』 1933 年 7 月 14 日付
- 49) 『育鳳』 第 10 号 p.10
- 50) 同 上 第 18 号 p.24
- 51) 同 上 第 23 号 p.8
- 52) 『たいちゅう』 第 20 号 p.57
- 53) 『育鳳』 第 18 号 p.24
- 54) 同 上 第 12 号 1994 年 p.4
- 55) 森崎 前掲書 pp.60 - 61
- 56) 同 上 pp.82 - 83
- 57) 『育鳳』 第 22 号 p.12
- 58) 同 上 第 8 号 1992 年 p.4
- 59) 同 上 第 22 号 p.7
- 60) 同 上 第 5 号 p.8

Daikyū Hōzan-chō Shōgakkō

(Taegu Hōzan-chō Elementary School):

A Case Study of a *Naichijin* School in Colonial Korea

Tsugio Inaba

The history of elementary schools for Japanese children in Taegu (J. Daikyū) goes back to Tassei Gakkō, a “Japanese language school” established in Talsōng by Korean and Japanese volunteers in 1899. In response to the request of Japanese residents in Taegu, the school started an elementary education program for Japanese children in 1904. The program developed into Daikyū Shōgakkō (Daikyū Elementary School; commonly known as Daikyū Daiichi Shōgakkō [Daikyū Number One Elementary School]) in October, 1905. In November, 1921, one part of the school developed into a new institution called Daikyū Hōzan-chō Shōgakkō (Daikyū Hōzan-chō Elementary School; also known as Daisan Shōgakkō [Number Three Elementary School]).

Hōzan-chō Elementary School is said to have been one of the top three elementary schools in colonial Korea. The purpose of this study is to clarify how the school, located in a local city and with a relatively short history, rose to such prominence. The paper also seeks to identify the school’s uniqueness in terms of education and school culture.

This research shows that Hōzan-chō Elementary School had advantages in location and in human resources. The school was conveniently located in Daikyū’s educational district. The parents of its students, who were intellectual elites active in North Keishō Province (J. Keishō Hokudō; K. Kyōngsang Pukto), built various PTA-like organizations and actively supported the school. The school’s faculty, who were mostly composed of graduates of Keijō Shihan Gakkō (Keijō [K. Kyōngsōng: present Seoul] Normal School), made efforts to live up to the parents’ support and expectations. These conditions contributed to the school’s success as one of the most prestigious elementary schools in colonial Korea.